國文學 6

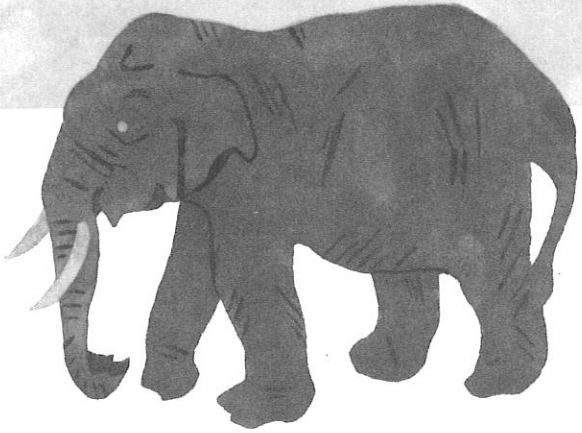
日本語・日本文学・日本文化 ―― 解釈と教材の研究

二〇〇九年 第五四巻八号

特集 時代小説の味わい方

❖私の好きな時代小説十撰
末國善己　寺田博　高橋敏夫

❖藤沢周平／平岩弓枝／山本周五郎
佐伯泰英／司馬遼太郎／池波正太郎 ほか



新連載
立川談志 平岡正明

最終回
心意伝承 遊働世界に生きる
本荘雅一

學燈社

國文學 6

❖特集 時代小説の味わい方

第五四巻八号　二〇〇九年六月号

定価一五〇〇円 本体一五二四円

浮世絵大事典

国際浮世絵学会編　絵師や作品・画題だけではなく、彫摺・様式・風俗・芸能など最新の研究成果を盛り込み幅広く収録し解説。絵師・画家は江戸期から近現代まで網羅。浮世絵の膨大な情報を一冊に簡便にまとめた初の大事典。B5判　七〇八頁　重版出来！　定価二九四〇〇円

江戸狂歌本選集 全十五巻完結

選集刊行会編　明和～安政期の江戸の代表的な狂歌集七十四種を原本に忠実に初めて翻刻した。江戸文芸の研究には必須の資料。第十五巻発売中　定価各一五七五〇円

能楽史年表 近世編〈全三巻〉中巻発売中

鈴木正人編　序文表　章　近世編上巻に続き、近世編中巻を刊行する。近世編中巻では元禄元年から正徳五年まで六〇〇〇余項目を採録した　定価各一五七五〇円

假名草子集成 第45巻発売中

花田富二夫他編　本集成は假名草子のすべてを網羅的に収録し厳密な校訂をもとに翻刻する。第45巻に収録の作品は続清水物語・そぞろ物語他収録定価一八九〇〇円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

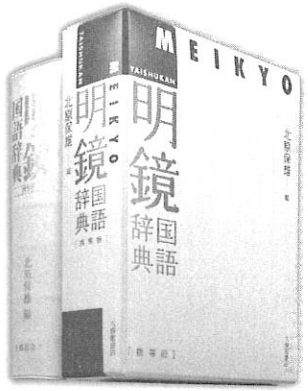
山田奨治・柴山　守編　ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

東京堂出版　〒101―0051　東京都千代田区神田神保町1―17　電話03―3233―3741　FAX03―3233―3746　http://www.tokyodoshuppan.com　（価格は税込）

言葉の常識が身につく、誤用がわかる。

明鏡 Meikyo 国語辞典 携帯版

別冊『明鏡日本語テスト』付き



北原保雄 編

言葉のニュアンスや使い分け、典型的な誤用など日本語の表現で迷うポイントをていねいに解説。言葉の常識が身につく、本物の国語辞典。赤と白のケースで新装登場！

●B6変形判・1826頁　定価2,940円

『明鏡』はここが違う！

▼間違えやすい、誤用についての情報を満載！
▼親切な表記情報で、漢字の使い分けが一目瞭然！
▼より適切な表現がわかる、語法・表現の解説！
▼現代に必須の新語・カタカナ語を多数収録！
▼国語辞典初、画数の多い漢字を大きく表示！

大修館書店　ご注文は ☎03-3934-5131　http://www.taishukan.co.jp　＊定価は税込

ISSN 0452-3016
雑誌 03787―6

4910037870698
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承

―遊働世界に生きる―

最終回　尽生成死譚④　虚空にさらされて生きよ

本荘雅一

どくん、どくん、どく、どく、どくどく、どくどくどくどく、どくどくどくどく、どく、どく、どく　く、ど　く、ど、　く、　ど、　く、　ど。

え、とまった。

心臓が止まったようだ。

静かだ。

やかましいほど高鳴り続けた動悸が消えた。

暗闇の中で、私は感覚を胸に集めてみた。

本当に心臓が止まっている。こんなことってあるのか。病気でもショックでもなく、しいて言えば明日生きることへの恐怖心から、生まれて初めて心臓が止まるなんて……。

さまざまな重圧（プレッシャー）に負けていた。もう、解放される。こんな汗びしょになることもない。

しかしこのまま無抵抗で死んだら、やはり自殺と同じだろうか。

まだ幼い息子、妻、父母、妹弟。みんなにばれるだろうか、無抵抗死だって。

ばれるだろうな、怒るだろうな、きっと。でも、それよりも、

やっぱり死ぬのはいやだ。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ（だいぶ時間たってないか？）嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ（まだ間に合うか？）嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ（がきんちょだった親父も川でおぼれ死にそうになったって）嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ（弟と庭でプロレスごっこした。庭石であの小さな頭をかち割りそうになった）嫌だ嫌だ嫌だ（「ボクは弟殺しになりかかった」）嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ（いまさら勝手言うな）嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ（こんなのは死じゃない）……

私は渾身（こんしん）の力を真ん中に集めた。なのに汗が止まっている。肝も凍る。歯ぎしりした。うめいた。

どくん、

鳴った。

ど、　く、　ど、　くん、　ど、　く、

ど　く、　ど　く、ど　く、どく、どく、どくどく、どくどくどくどく……

今度は早鐘のように激しい動悸を打ち始めた。血が走り始めた。再び汗が噴き出した。冷たい汗ではなく、熱い汗が。

ということが、あったな。

実際我が身に起きたことなのに、今思い出すまですっかり忘れていた。数年前のことなのに、遠い記憶にすぎなくなっていた。今見た夢が、はなからリアリティーを放棄したばかばかしいものだったのに、あの心臓が止まった瞬間よりも追い詰められて、醜態をさらしてしまった。まったくムカつく夢（ヤツ）だ。

私は特攻隊員にされたのである。一九四〇年代の話ではない。ほやほやの現代でだ。本日夕刻と、招集がかかっていたが、ばかばかしいのと面白半分とで、のらくらしていた。そうか、俺は特攻隊員として散華するのか。嘘っぽいけど、実際そうなるならしかたないか、と。

だがいつまでもこのばかげた夢が覚めない。どんどん空気が重量をまして、私を戦地へと促す。〝敵〟は不明。飛行機のマニュアルも研修もなし。無茶だ。しかし本日出撃し、「一機一艦」、見事に散華せねばならない。笑うべき状況が、ひしひしと強引に現実として迫ってくる。わからないが、どうあっても死ななきゃならないらしい。そんな急に言われても。私は口実を探した。風邪ひいたことにするか。怪我でもするか、手足の一本でも切断するか。逃げる手立てを考えるが、逃げられない気がしてくる。これも運命なら生死一如だ。敵艦に突っ込んで我が身が吹っ飛ぶ瞬間を、イメージしてみる。すると爆発寸前までイメージできてしまって、私はうろたえた。まて、本当かよ。安直すぎる展開なのに、本気か。リアリティなさすぎ。なのにどうしてこうも締め付けてくる。空は静かだ。いくら得心できなくても、のんきな風景でも、状況が動いている。残された時間が空費されてゆき、風がにやにやときらめく。これって、「末期（まつご）の目」というやつか。その辺のものがみんなきらきらしてる。母に、もう急がないと遅れるとせかされて、まだ何の着替えも準備もしていないことに気が付く。ていうか、母が何でそんな、ふだんと真逆な立場をとる。個人の意思とは無関係な役にはめ込まれた状況、そういうのを布置（コンステレーション）と、

河合隼雄が最終講義で言ってたっけ。にしてもリアリティなさすぎ。何、そこにこそ超現実がたってくる!? だけど死ぬんだよ。変じゃないか。すでに汗をかきながら、背中に湯気を立てながら、私は荷造りをした（何をもってゆこうとしたか知らないが）。動悸が高鳴ってくる。眼の下や鼻に冷や汗がたまり、湯気と汗と、半熟涙で視界が曇る。リアリティなさすぎ。電車に駆け込む。わからないが、間に合おうとがんばってしまっている。特攻基地への集合に。リアリティなさすぎだよ。なんだってんだよ。コンステレーションだと！ それがどうした。ざけんなよ!!

暗闇に、目を閉じているのがわかった。この歳になって、四十過ぎて生まれた娘が隣に寝ているのを思い出せた。布団の中に私はいる。心臓はバクバク言ってるが、思ったより汗はかいてない。あの、止まった時の汗がひどかったよな。けど、あの時よりひどいざまじゃないか。涙と鼻水とよだれでぐしょぐしょになって泣きわめいて懸命に自分の屠殺場へなだれ込もうとして、要するにパニック状態になって。「不惑」とはおよそかけ離れた体たらくであった。

目がさえてしまったので起きだして、書棚から知覧特攻平和会館で買った『知覧特別攻撃隊』（村永薫編　一九八九年）冊子を取り出した。「笑顔の特攻隊員」の写真が少なからず掲載されている。私心を排しお国のために一命をささげるという、至高崇高の境地に達した者の精神の現れ、というふうにも言われる。あるいは、泣き顔を隠そうとすれば笑顔になるしかない、悲しみが深いほど美しい笑顔にもなる、というふうにも言われる。

特にどちらかに、くみしたり否定したりするわけでなく、私は以前から特攻隊員たちのほっとしたような笑顔が、どのような状況で出てくるのか気になっていた。まして今は、自分ではこの境地に到底至れぬことがはっきりしてしまった。ちょっと悔やしい。

ほんとうに彼らの笑顔は、いったいどのような体感からもれ出てくるのだろうか。

特攻隊員はなぜ反乱しないのか

小学生の息子と夏休みを屋久島の山中で過ごそうとしたことがあったが、台風に阻まれ、鹿児島港で足止めを食った。空は快晴だが海は時化ているとのこと。その場で計画変更。鹿児島から自宅へ向けて放浪することにした。その手始めとして、知覧へ向かってみたのである。

十七歳から二十二歳くらいの若者が大半を占めるという

ことは聞いていたが、遺影群をみるとみなほんとうに若い。凜とした美少年ばかりと言ってもよい。その彼らの書き残した遺書や日記、手紙などの実物が展示されており、見る者を圧倒する。

文章は、お国のためにといった、型通りのものも少なくはないが、そうであっても彼らの文字は見る者の全身を貫かずにはおれない気を放射していた。達筆であり、それ以上に霊的なのである。

沖縄のひめゆりの塔へ行った時も、遠目にもガマ（地下壕）の口から何やら陽炎のようなものが盛んに吹き上がっているのが感じられて、妻も口を押さえて悲鳴をあげたことがあった。知覧特攻平和会館の中は、そうした炎がいたるところで燃え立つ窯のような空間であった。

隊員たちの、〝ほんとうの気持ち〟を詮索する愚は犯すまい。

途中の島や海に不時着して生還した人々もいれば、偶然生きながらえた人々もいる。「ニッコリ笑って機上の人」となり散華した人々、にこりとはせずに散った人、事故によって亡くなった人、さまざまである。それぞれの真意もまた、さまざまであり、時間とともに変化もする。

精神分析のまねごとは控えるとして、私にとって驚嘆すべきことはいくつもある。特攻隊に関して、軍事専門外の者でもすぐに手に入る資料で見る限り（参考文献リストは本編末尾参照）、

- 狂気に陥った隊員の事例が見つからない。
- 料亭などの慰安婦を求めた人はいても、婦女暴行を働いた事例が見つからない。
- 上官や憲兵を血祭りにあげた事例が見つからない（憲兵を恫喝した人々はいる。上官への暴行は終戦後のこととしてあらわれていた）。
- 司令官の居所を爆撃した事例が見つからない。
- 大本営、もしくは皇居を爆撃しようと企図した事例が見つからない。
- 戦後生き残った特攻隊員の中には、「特攻くずれ」と忌避されてしまうような挙措言動をとる人もいたらしいが、かつての上官や司令官を実名で告発し、裁判等で正式に責任追及した事例が見つからない。

その時代、その場の空気を知らぬ者としては、死を決した人々の中からは、こうした行動が起きてもよさそうなものだと思えてしまう。ただし大岡昇平著『レイテ戦記』に、「基地を飛び立つと共に司令官室めがけて突入の擬態を見せてから飛び去る特攻士があったという噂が

語られ」ていたことが、かろうじて指摘されているのを見るが（上巻二八四頁）。

戦没学生の手記などを読むと、西洋の哲学、文学、科学の知識教養を旺盛に吸収し、日本の政治軍事に関して極めて冷徹な批判を加えている人々が、大勢いたことがわかる。つまり彼らならば、わざわざオウンゴールを命じる狂気の監督を退場させる行動をとることも、思い付かなくはなかったろうと思われるのである。

さまざまな状況、しがらみがそれを許さなかったこともあろう。自分の行動が家族親類に及ぼす影響を顧慮したとも言われる。そうしたことも含めて、である。〝決死〟とも一線を画した、〝必死〟の立場に追い込まれながら、血縁・地縁への目配せをも忘れずに態度決定していたという、驚くべき事実がそこに反映されているのだ。

キレた者が一人もいなかったらしい事実は、現代人を愕然とさせるものであっていい。

なぜそのようなことが可能だったのか。

知覧では、出撃前の特攻隊員たちは飛行場に近接する三角兵舎という宿泊所に寝泊まりする。竪穴住居のように掘りかためられた空間に、三角屋根をかぶせただけの、一見惨めな建築物である。敵国の爆撃機に発見されにくいようにという意図説明がされているが、それにしても〝軍神〟とみなされる人々にたいして、これはあまりにもひどい仕打ちではないかと、その時は思ってしまった。

が、すぐ思い出したことがあって、帰宅後さっそく岡正雄の『異人その他』（一九九四年　岩波文庫）を開いてみた。

あった。

「秘密結社高級結社員の舎屋」というキャプションの付された写真（一三六頁）。まさに三角兵舎である。これは、オーストラリア東方、メラネシア海域に浮かぶニューヘブリディーズ諸島にあるもので、岡正雄は以下のように説明する。

> メラネシアの秘密結社には一般的に階位が存在する。この図は高級結社員たちの舎屋で、秘密の場所であり、非結社員は近づくことができない。ここで入社式や秘密儀礼がおこなわれるし、仮面なども保存されている　（一四〇頁）

内部構造についての写真や説明はないので、内側まで三角兵舎と同じかはわからない。だがこの中で儀式や儀礼がおこなわれるのであれば、集団が居住できるようなスペースと高さが必要だろう。竪穴式になっていること

（上）三角兵舎の外観（『知覧特別攻撃隊』ジャプラン、1989より）
（下）秘密結社高級結社員の舎屋（『岡正雄論文集 異人その他』岩波文庫、1994より）

は十分考えられる。

日本列島の南玄関たる鹿児島から、南西諸島、フィリピン諸島、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアへとつながる海の道を、ここでも想起せざるを得ない。こうした舎屋は、平たく言えば、環太平洋海民たちの、若者宿であったのだろう。

縄文以降、竪穴住居の基本機能は、中央の竈で焚かれた火を保持することである。遺跡の竪穴住居を見学し、その中に入ってみるだけでも十分に感じられることであるが、こうした空間は地霊のささやきが沈澱しているような、心地よいよどみをなす。ここで火の霊も感じつつ、煮炊きした大地の霊物を共食すること自体が、すでに呪術と言ってよい。

三角兵舎の発案者が、実際に敵の目をくらます意図でのみ設計したのだとしても、やはり太古より流れくる心意伝承から自由ではあり得なかった。出撃命令が出て軍事旅館を引き払い、ここにやってくる隊員たちは、正式に特攻隊という秘密結社に入社し、いわばその魂魄を、地霊の湯ぶねに浮かべ、沐浴する。

などという解釈が、どこまで妥当かはもちろんわからない。ただ少なくとも、一見ひどい仕打ちに見える三角兵舎への居住も、死を命じられる隊員たちにたいして何

らかの霊的処理がなされ、それが、幸か不幸かかなりの濃度で成功していたことは、確かである。

死ぬ確率が限りなく百パーセントに近い〝決死〟の任務（ミッション）と、〝必死〟の特攻とは、近いようでいて、それでも直接、間をつなぐことの不可能な根本的な次元の違いがあるのを、忘れてはなるまい。

〝決死〟は、任務遂行後もなお自分の能力や運の良さなどによって、生還する自由は与えられている。ところが〝必死〟の場合、死ぬことと任務遂行とはイコールである。任務遂行してなお生還することは許されないし、あり得ない。

だから、勢いで特攻と同等の働きをしたという例は、歴史をひも解けば少なからず出てくるが、「特攻隊」のような、本質的には志願でもなく（志願者もいたが、全員ではない）、上からの命令で編成される必死隊は、人類史上、前例がなかった。

前例がなかったから、反乱が起きなかったという事実がいかに驚異的であるかに、私たちは気付きもしない。いよいよ最後の出撃前夜、出撃間際、という段になっても、誰も反乱を起こさなかったのだ。不思議というより、恐るべきことではないか。

それほど三角兵舎という、最後の生活世界は、呪術的に〝成功〟してしまっていたのである。少なくとも、特攻隊経営が粛然と行なわれ得たことの、一因ではある。

花を振って送る

特攻隊は、人類史上の比類なき特異点だ。

現代の爆弾テロですら、テロリスト本人の精神的自律が保たれているかは極めて不審なほどに、宗教的エクスタシーあるいは強迫によって、コントロールされている。

しかし特攻隊員たちの残した遺書や手記は、私たちがたじろぎ赤面するほど達筆であり、立派な文章である。日本の短からぬ歴史の中でも、突然変異に等しい存在と言える。

だがやはり、「私」たちの心意伝承を踏まえてもいるはずで、隊員たちに関しての感動は、抑（おさ）えることができない。そして通常私たちは、特攻精神なるものを、自己犠牲のサムライ精神と同等に考えて疑わない。

大間違いなのは、特攻隊員を、サムライのごとき決死の覚悟を備えた軍人や、そういう素質のある若武者たちと、どこかで思い込んでしまっていることである。そうではなく、学生が多いのだ。つまり練達のベテランパイロットではなく、未熟な「飛行予備学生」で、空中戦時

の高得点を期待できない人たちであるからこそ、体当たり部隊に配属させられたのである。整備兵や女子挺身隊が憤激し、泣くほどのぼろ飛行機を与えられて。低コストで大きな効果を確実かつ効率的に生み出すために。

彼らに現代の学生より気骨があったとしても、そもそも武士武将に比すべき条件さえ整えられていなかった。

にもかかわらず、武士たちですら経験したことのない「特攻隊」に、彼らが飛躍し得たということは、心意伝承の最奥の秘密に迫る問題を、はらんでいることであろう。それにどこまで迫れるかは心もとないが、やはり残された資料からさぐってみたい。

「特別攻撃隊」の概念に入る部隊は、まず海軍の航空部隊「神風特別攻撃隊」（海軍は「しんぷうとくべつこうげきたい」と音読みしていたが、一般には「かみかぜ～」と読まれるようになった）があり、続いて陸軍の航空特別攻撃隊。さらに、海軍の船舶部隊から、人間魚雷「回天」、水中飛行機「海龍」、小型潜水艦「咬龍」、人間ミサイル「桜花」。陸軍の人間爆弾艇（ボート）「震洋」、空挺特攻隊、刺突爆雷（棒の先に爆弾を付けて草むらに隠れ、戦車に押し付けて爆破する）、人間機雷「伏龍」（潜水服を着て海中に潜み、敵上陸用舟艇の船底に刺突爆雷を突き上げる。ギャグ漫画のような発想だが、実用される前に終戦となった）、などがある。

いずれも特攻隊としての哀史があり、それらを記録した文献はおびただしく出版されている（ただ、特攻隊員とは違って満足な食事も与えられずに続々と過労死した整備兵たちや女子挺身隊、実用化されなかったものも含めてさまざまな特攻兵器の開発に着手させられた技術者たちの、まとまった手記・証言が今のところ管見に入らないが）。すべて正当に研究され、その成果は保存されるべきであるが、なかでも先般『なでしこ隊～少女達だけが見た〝特攻隊〟封印された23日間』（二〇〇八年九月二十日　フジテレビ）のタイトルでテレビ放映までされた、知覧の陸軍特攻隊の〝ドラマ〟が、民間に熱い感動をもって受け入れられてしまう現象に、注意を払っておこう。

そもそも、知覧が特攻隊の象徴的舞台であるかのように、私たちに印象されてしまうのはなぜだろうか。

高木俊朗（たかぎとしろう）著『知覧』（一九六五年　朝日新聞社　のちに改訂されて『特攻基地知覧』一九七八年　角川文庫）がもたらした影響も看過できない。歴史書としてどこまで評価しうるかの判断は専門家に譲るが、文学として読むならば、一つの名作には違いあるまい。私たちの心に響く風景が、ここには多く語られている。

陸軍報道班員として現地に詰めていた高木は、それ以前、日本映画社にいてカメラや監督まで担当したこともあるとのことで、その文章もすぐれてビジュアルでイメージ豊かなものである。したがってこの作品は、現場の状況を高木の目というカメラを通して編集された、フィクションと見ておけば大過ない。

そして私たちは、虚構（フィクション）であってもその中に圧倒的な心的事実・真理が含まれることをも、吟味してみるべきと思う。私たちの心意は、いったいどのような風景に吸引され、記憶の深部へ刻み込もうとしてしまうのか、といったことを知るためにも。

とくに序章「悲愁の桜」に語られる風景に、私たちはほとんど例外なくうたれてしまうであろう。

出撃する特攻隊機の操縦席を、地元知覧高等女学校の女生徒達が、八重桜や山桜の花枝で飾る。

生徒たちは、その残りの枝を持って、特攻機の離陸して行く時に、高く激しくふった。その花びらが、雪のように、乱れ散った。どの少女も、涙の流れるにまかせていた。祖国の難に一命をささげようとする青年の悲壮な決意に、心をうたれていた。

（『特攻基地知覧』四頁）

特攻隊が飛び去った方向には、秀峰開聞岳（かいもんだけ）がそびえている。薩摩富士とも呼ばれる美しい独立峰で、特攻隊員にこれを見せることも司令部で意図されていたのではないかと思えてしまう。それはともかく、感慨に浸りながら見送る高木に、一つの啓示がもたらされる。少し長いが、味わっておこう。

開聞岳を見ている私の目のさきを、白いものが、ちらりと、流れた。私は気をひかれて、手をさしのべて受けとめた。桜の花びらである。広い飛行場のことで、近くにはなんの木もなかった。さきほどまで、花ふぶきをふらせていた女学生も、もう、いなかった。私が手に受けた花びらは、飛行場の空から散ってきたのである。私は花ぐもりの空を見上げて、心のひきしまるのを感じた。その花びらは、特攻機の操縦席にあったのが、吹き流されてきたのだ。

私は、その花を散らした青年の心の中にあるものを、多くの人々に伝えなければならないと思った。私は数多くの特攻隊員と近づきになり、いく日かを一緒に過ごし、そして最後の別れをかわした。そうした時の青年たちの言葉や動作の中には、死に直面した人間の心の中にあるものがひらめいていた。ある学徒出陣の操縦者は、思いつめたように私にいった。

「この戦争は日本の負けですよ。しかし、われわれは命令だから死にます」

こうした言葉は、当時の国民が口に出すのが、はばかられていた。このような青年たちは、私のながい従軍生活のなかでも、忘れがたい、痛烈な印象を残した。私は飛行場で青年たちと決別の握手をした時、必ずこのことを書き残そうと思った。

（『特攻基地知覧』六頁）

前回の、自殺者が履物を残す話のところでも述べたように、どうあがいても切れない、清算しきれない冥界（コンステレーション）との関係に、著者自身がからめとられてしまった瞬間が、空から舞い降りてくるひとひらの桜という、美しいイメージで語られているのである。

この高木の作品の影響力も大きかったと思われるが、それにも増して強烈なインパクトを人々に与えたのは、写真であろう。

ここに、日本人が一度見たら終生忘れられないであろう、極めつけの一枚がある。高木の文章でも触れられていた、知覧高等女学校の生徒たちが、出撃する特攻機へ向かって桜の花枝を振る場面の写真である。

戦争も特攻も何も知らない幼い時分の私も、この写真は胸に焼きつくのを感じた。美しくも鈍く光る哀しみが重くのしかかってきた。

この写真の当事者たちに、政治的な〝美化〟の意図はない。〝必死〟の任務に逆らうことなく、見送ってくれる人への礼節も忘れない特攻隊員に、万感胸に迫って花を振る少女たち、その光景にうたれたカメラマンの即応。史上最高峰と言ってよい美しい写真が、こうして撮られた。

そして、これが知覧で撮られたということが、特攻隊のメッカ、聖地としての知覧ということを、一般の人々に印象付けてしまったはずだ。

他にも特攻基地としておもなものは、陸軍では万世（ばんせい）飛行場や満州基地があり、海軍の鹿屋（かのや）、国分（こくぶ）、指宿（いぶすき）、串良（くしら）飛行場、陸海軍台湾航空基地などがあげられよう。そうしたところでも、同じ心づくしはあったろうが、この知覧の一枚が最も象徴的で、インパクトが強かったに違いない。

写真の力は大きい。一九四四（昭和一九）年一〇月二五日、神風特別攻撃隊敷島隊の「成功」が、全世界に誇らしげに打電された。これが特攻隊第一号とされている。